

平成22年度「海と船の博物館ネットワーク活動」事業完了報告

事業内容

全国33か所の博物館、資料館等が開催する海、船、川、湖沼に係る33の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示を通して海事知識の普及啓発を図った。また、海と船の巡回展展示アイテム3セットを全国12か所の博物館、水族館等に貸し出し、海と船の巡回展を開催し、海と船の博物館ネットワークホームページにて、海と船の企画展情報及び海と船の巡回展情報を告知し、ホームページの保守・運営を行った。さらに、全国の過去支援館を対象とした研修会を開催し、支援事業の事例発表やワークショップによる相互連携をテーマとした研修会を開催した。

1. 「海と船の企画展」への支援（33館33企画展）

①名 称：巡回展「川と海を旅する魚たち」

主 催 者：佐賀県立宇宙科学館

開催時期：平成22年3月20日（土）～平成22年5月9日（日）

場 所：佐賀県立宇宙科学館

内 容：近年、回遊魚の生活史が解明されつつある。そのなかでも、川と海を回遊するサケやウナギは、私たちの食生活と深く関わっている。私たちがそれらを活用していくには、回遊や成長のメカニズムを理解し、保護や共生のあり方を考えていかななくてはならない。本展では、最新の知見を活かした参加体験型の展示によって回遊と成長のメカニズムを紹介し、サケやウナギを水産資源として活用する私たちが、魚たちの生命とそれらを育む環境の大切さについて理解できるようにする。

②名 称：資料紹介展「川と海を旅する魚たち」

主 催 者：岐阜県博物館

開催時期：平成22年5月29日（土）～平成22年7月19日（月・祝）

場 所：岐阜県博物館

内 容：身近なサケ・アユ・ウナギという回遊魚の“旅”から魚と環境・人とのかかわり・自然の恵みについて考える。

（1）食卓に見る回遊魚 ～体のしくみと特徴～

（2）回遊魚の冒険 ～サバイバルと成長～

（3）回遊魚とわたしたちのかかわり ～食と環境～

（4）徹底比較！長良川鵜飼 vs 小瀬鵜飼

③名 称：長崎の海と船展

主 催 者：長崎市歴史民俗資料館

開催時期：平成22年7月1日（木）～平成22年8月31日（火）

場 所：長崎市歴史民俗資料館

内 容：鎖国時代の日本における唯一の海外貿易港であった長崎港にスポットを当て、長崎港の通史、1798年に沈没したオランダ船を引き揚

げた出来事をはじめ、郷土の歴史に関わりの深い企画展示を開催する。

- ④名 称：「2010年UMAとの遭遇～知られざるミステリーアニマルの世界」
主 催 者：萩博物館
開催時期：平成22年7月3日（土）～平成22年9月5日（日）
場 所：萩博物館
内 容：昔の人々が積極的に（もしくは必然的に）自然界に分け入り、そこに息づく生命に接し、観察力・想像力を働かせてきたことの「賜物」ともいえるもの―すなわち「伝説生物」（河童や人魚など）や「未確認生物」（タキタロウやツチノコなど）を特集した展示会を開催し、人々が自然へ分け入り探検してみたいと欲する機会を創出する。
- ⑤名 称：海藻、35億年の旅人 ―それは生命（いのち）をつたえるものがたり―
主 催 者：千葉県立中央博物館
開催時期：平成22年7月3日（土）～平成22年9月6日（日）
場 所：千葉県立中央博物館
内 容：生物としての海藻、藻類を理解して生物多様性を学び、あわせて人との関わりを知り、人類の生き方としての共生を考える。
日本は周囲を海に囲まれた環境にあり、海藻資源に恵まれた漁業の盛んな地域である。人々は歴史的に海とかかわりの強い生活を営み、ノリ、ワカメ、テングサ、コンブ、アオサなど海藻は常に食材として身近にある。しかし、一般に生物として、海藻を含む藻類を知る人は多くない。藻類は35億年の歴史をもって進化し、海をはじめとする多様な環境に適応放散して私たちの身近な生活空間の中に共に生きている。海藻を導き手として藻類の進化系統、分類、形態、生態、多様性、人とかかわり等を解説し紹介した。
- ⑥名 称：「夏休み子どもミュージアム ふるさとの海のものごと
―見つけよう！瀬戸内海の魅力」
主 催 者：香川県立ミュージアム
開催時期：平成22年7月13日（火）～平成22年8月31日（火）
場 所：香川県立ミュージアム
内 容：香川県民にとっては馴染み深い瀬戸内海。いち早く国立公園に指定されるなど、白砂青松、多島美の景観は国内外から高い賞賛を受ける。
本展覧会においては、漁業・船・景観をテーマに歴史資料や民俗資料、美術作品を通して、瀬戸内海の豊かな自然や歴史、文化、瀬戸内海の「今」と「むかし」などを子どもたちに知ってもらったり、これまで気づかなかった瀬戸内海の新たな魅力に気づいてもらうことによって、瀬戸内海を「ふるさとの海」として認識、愛着をもってもらうとともに、瀬戸内海的环境良化に取り組む運動や人々を紹介することによって、瀬戸内海を大切に育んでもらう事を目的とする。

- ⑦名 称：江戸時代の海路の賑わい 一海図と海路道中図の展示一
主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科 海事博物館
開催時期：平成22年 7月16日（金）～平成22年10月30日（土）
場 所：神戸大学大学院海事科学研究科 海事博物館
内 容：海路図屏風六曲一双（右隻）、海路図屏風六曲一双（右隻）、海路図屏風下絵（巻物）、江戸より長崎道中図巻（巻物）、開成丸航路図（軸図）、航海図：紀州藩御舟手の江戸大阪間航路図、廻船之図絵、改正東海舟程全図、八筒州航海之図、ペリー来航の図、江戸時代の藩が描かれた壺、皿等の海図と海路道中図の展示を中心に展示し、江戸時代の海路の賑わいについて紹介する。
- ⑧名 称：「古代の海の生き物展～アンモナイトの泳いだ世界～」
主 催 者：五島観光歴史資料館
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年8月31日（火）
場 所：五島観光歴史資料館
内 容：普段五島では化石標本を見る機会がなく、古代の海に住んでいた生き物の化石標本（アンモナイト、三葉虫、古代魚など）を当資料館内で展示し、古代の海の生物の生命の誕生から進化の過程について、幅広い年齢層に興味関心を深めていただく機会としたい。
- ⑨名 称：夏季企画展「中世の港湾都市神戸」
主 催 者：神戸市教育委員会 神戸市埋蔵文化財センター
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年8月29日（日）
場 所：神戸市埋蔵文化財センター
内 容：神戸は平安末期、平清盛によって福原京が置かれた場所で、また平家の一門が住んでいた所でもありました。当地は古くより海上交流の拠点として栄えてきましたが、とくに清盛が中心となって、大輪田の泊を修築し、日宋貿易を推し進めた頃は、現在の港町神戸の原型が形成された時代といえます。今回は、福原京との関連が深い祇園遺跡や、古代から近世の神戸である兵庫津遺跡からの最近の発掘調査資料などを展示し、港町神戸の変遷や生活の様子をわかりやすく説明します。また、神戸以外の近隣の港町から出土した輸入陶磁器を中心とした遺物や江戸時代初期の兵庫津を示す絵画資料、中世の船の模型なども使い、より立体的な展示を試みます。
- ⑩名 称：夏期企画展「カメ・カニ・スナ ～埼玉で海あそび～」
主 催 者：埼玉県立川の博物館
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年8月31日（火）
場 所：埼玉県立川の博物館
内 容：当館は川に関する総合博物館として運営されているが、本企画展は川とつながっている海、その中でも砂浜に関わる展示の開催をしたい。環境の変化によって砂浜に生息する生きものが危機に瀕している状況や、大量に打ち上げられるゴミの問題などを取り上げ、夏休み期間であることから、子どもでもわかりやすい内容で環境問題が

学習できる展開としたい。

- ⑪名 称：春採湖とヒブナ
主 催 者：釧路市立博物館
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年9月26日（日）
場 所：釧路市立博物館
内 容：昭和12年にヒブナ生息地として国の天然記念物に指定されている春採湖は、市街地にあつて自然豊かな湖であり、春採公園として市民の憩いの場となっている。しかし、最近、湖とその周辺では外来生物の繁殖でクローズアップされることが多く、改めて文化財としての春採湖とヒブナについて理解を深めてもらうと共に、その保護・保全を考えてもらう機会とする。
- ⑫名 称：湖底探検～びわ湖の底はどんな世界？～
主 催 者：滋賀県立琵琶湖博物館
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年11月23日（火）
場 所：滋賀県立琵琶湖博物館
内 容：琵琶湖の深層部（水温躍層以深：水深>30m）の環境や生物を紹介し、そこが琵琶湖の生態系において重要な場所であることを来場者に理解してもらふ。湖底でおこっている問題を提示し、環境保全のために何をしたらよいかを考える機会を提供する。
湖底という非日常的な空間の紹介にあたり、来場者が展示内容に親しみやすいよう、湖底を探検するような演出を行う。
- ⑬名 称：ひょうごの生物多様性－瀬戸内海 VS 日本海－
主 催 者：兵庫県立人と自然の博物館
開催時期：平成22年7月17日（土）～平成22年12月26日（日）
場 所：兵庫県立人と自然の博物館
内 容：兵庫県の生物多様性、特に海域の生物多様性に対する県民の意識・理解の向上を図る。また、生物多様性が日常生活に深く関わっていることを知ってもらふ。兵庫県の生物相の地域性とそれをもたらしている要因、瀬戸内海と日本海それぞれを特徴づける生業や文化、まちなみ、風景などを、多くの標本、資料などを用いてわかりやすく紹介する。
- ⑭名 称：特別展示「海の王者－サメー」展
主 催 者：笠岡市教育委員会、笠岡市立カブトガニ博物館
開催時期：平成22年 7月20日（火）～平成22年 8月31日（火）
場 所：笠岡市立カブトガニ博物館
内 容：カブトガニは「生きている化石」に代表される動物である。カブトガニは瀬戸内海と九州北部に生息している。その中でも笠岡市の神島水道はカブトガニの繁殖地であり、国の天然記念物の指定を受けて、手厚く保護されている。しかし、近年環境の悪化に伴いカブトガニが減少している。カブトガニを保護するため博物館では様々なテーマを切り口に環境保護の必要性を展示の中で訴えている。このたび

カブトガニと同様に太古の時代から生き続けている「サメ」の特別展を開催し、違った観点から種の保全と環境の重要性を訴えることを目的とする。

- ⑮名 称：開館 10 周年記念特別展「日本海の至宝」
主 催 者：新潟県立歴史博物館、新潟日報社、NST新潟総合テレビ
開催時期：平成 22 年 7 月 24 日（土）～平成 22 年 9 月 5 日（日）
場 所：新潟県立歴史博物館
内 容：平成 12 年 8 月 1 日開館の新潟県立歴史博物館は、平成 22 年 8 月 1 日に満 10 周年を迎える。これを記念して特別展を企画する。日本海に面する新潟県は長い海岸線を有し、その恩恵に浴してきた。日本海は豊富な水産資源で沿岸地域の人々の暮らしを支えただけでなく、交通路となって人と物の交流に寄与してきた。この特別展は、日本海に面する各地の至宝を展覧し、日本海の果たした歴史的役割や文化的特色を紹介するものである。
- ⑯名 称：海洋国家薩摩 ―海が育んだ薩摩の文化―
主 催 者：尚古集成館
開催時期：平成 22 年 7 月 24 日（土）～平成 22 年 10 月 14 日（木）
場 所：尚古集成館
内 容：島津氏の領国南九州は、多くの船が行き交う海外交易の拠点であった。島津氏の領国文化は、海外と行き交う船によってもたらされた外国の文化の影響を強く受けたものになっていた。この異国情緒あふれる文化を、食文化・出版文化・工業技術などを通じて紹介する。
- ⑰名 称：幸地川の生きものたち ～名護湾にそそぐ川①～
主 催 者：名護博物館
開催時期：平成 22 年 8 月 13 日（金）～平成 22 年 9 月 5 日（日）
場 所：名護博物館
内 容：沖縄は亜熱帯に位置することもあり、身近な海や川で様々な生きものを観察することができる。名護湾にそそぐ川のうち、今回の企画展で取り上げる幸地川は街中を流れ、親水の間として市民に親しまれている小川である。この川は人の手も入ってはいるが、意外にも多くの生きものを見ることができる。この街中の小川にどんな生きものが暮らしているのか紹介し、身近な自然について考える機会を提供する。
- ⑱名 称：白瀬日本南極探検隊 100 周年記念特別展
南極の氷に挑んだ日本の船 - 木造機帆船「開南丸と歴代南極」
主 催 者：白瀬日本南極探検隊 100 周年記念プロジェクト実行委員会（白瀬南極探検隊記念館）
開催時期：平成 22 年 11 月 2 日（火）～平成 23 年 1 月 16 日（日）
※平成 22 年 4 月 1 日（木）～平成 23 年 4 月 3 日（日）の期間は自主開催（早稲田大学で開催）
場 所：白瀬南極探検隊記念館

内 容：秋田県の実験者、白瀬轟を南極探検隊長とする日本南極探検隊は、明治43年に東京芝浦埠頭を出航して、平成22年で100周年を迎える。これを記念して、日本が誇る世界屈指の砕氷艦（南極地域観測船）「しらせ」や開南丸など関連した地域において特別展を開催し、明治の船と平成の船を多角的に見学できるように模型などを活用し、白瀬日本南極探検隊の偉業と歴史の南極観測船をからめた企画展を行う。

①9名 称：福岡市博物館開館20周年記念・NHK福岡放送局80周年記念
対外交流史5 栄西と中世博多展

主 催 者：福岡市博物館、西日本新聞社、NHK福岡放送局、
栄西と中世博多展実行委員会

開催時期：平成22年9月11日（土）～平成22年10月31日（日）

場 所：福岡市博物館

内 容：九州北部の玄界灘に開けた博多は、中世の日本において最大の国際貿易都市であった。しかし、そうした博多の輝かしい時代は、広く一般に認知されているとは言い難い。そこで、開館20周年を機に、対外交流史シリーズ5回目の特別展として、中世博多の歴史を紹介する展覧会を開催し、海に開かれた都市“博多”の存在をアピールする。

②0名 称：順風往来－薩摩をめぐる東アジア海域交流史－

主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

開催時期：平成22年10月1日（金）～平成23年1月24日（月）

場 所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

内 容：九州島の西南端という海上交通の要衝に位置する薩摩は、日本本土部の南玄関口として、東アジア海域を航海する国内外の船舶が行き交った地域である。南薩摩地域に残された中国などの諸外国や国内他地域との海上交流の隆盛を伝える資料等を展示・紹介し、薩摩からみた東アジア海域の海上交流史をひも解く。

②1名 称：企画展「利根運河通水120年記念合同企画事業－利根川舟運と利根運河－」

主 催 者：千葉県立関宿城博物館

開催時期：平成22年10月5日（火）～平成22年11月28日（日）

場 所：千葉県立関宿城博物館

内 容：平成22年(2010)は利根運河通水（明治23年(1890)2月25日）から120年をむかえる。そこで、当館と野田市郷土博物館・流山市立博物館の3館合同で「利根運河」について取り上げ、各館ごとのテーマによって利根運河の展示会を開催する。当館は「利根川舟運と利根運河」と題し、江戸時代中期以降から舟運が衰退するまでの利根川舟運の経過を紹介するなかで利根運河の果たした役割について紹介する。

②2名 称：「海と城館が支えた祈りの世界」－大隅正八幡宮と宮内の1000年－

主催者：霧島市立隼人歴史民俗資料館

開催時期：平成22年10月5日（火）～平成22年12月5日（日）

場所：霧島市立隼人歴史民俗資料館

内容：海幸・山幸物語ゆかりの大隅正八幡宮（鹿児島神宮）や社家館跡・寺院跡が分布する鹿児島県霧島市隼人町宮内地区の1000年を、神宮の宝物及び発掘された多量の海外陶磁器などから海とのつながりについて考える。

②③名 称：大黒屋光太夫記念館開館5周年記念展

「海のむこうへのあこがれ - 漂流記と漂流文学 -」

主催者：鈴鹿市大黒屋光太夫記念館

開催時期：平成22年10月6日（水）～平成22年11月28日（日）

場所：大黒屋光太夫記念館

内容：江戸時代は、船が最大の物流手段であり、“海の道”がもっとも発達した時代です。そのため、遭難する船舶の数も激増し、数多くの漂流事件が発生して、多くの漂流記が残されました。それらの漂流記は、江戸時代には数少ない海外情報の担い手として、明治以降は人びとの冒険心を掻き立てる海洋文学の礎として活用されてきました。今回の展示では、江戸時代の物流を担った船乗りたちが例外的な海外接触を果たした記録である漂流記を取り上げます。そして、大黒屋光太夫を中心とした漂流者および漂流記がどのように捉えられ、現代まで語り継がれてきたのか紹介します。

②④名 称：海と生きる—海から見た江戸時代のとっとり—

主催者：鳥取県立博物館

開催時期：平成22年10月9日（土）～平成22年11月14日（日）

場所：鳥取県立博物館

内容：漁撈や列島国内外における交易、文化交流など、人々の営みのなかで果たしてきた「海」の役割は大きい。しかし、鳥取県（因幡・伯耆国）は比較的平坦な海岸線を有し良港に恵まれていないことから、鳥取の「海」の歴史について従来、注目されていなかった。今回の展覧会では、鹿野城主亀井茲矩の朱印船貿易、鳥取池田家の水軍組織、漁業・廻船業・海の信仰などの庶民の暮らし、アメリカ船に救出された長瀬村（現鳥取県湯梨浜町）の利七や朝鮮漂流民など藩領民と異国との出会い、幕末の鳥取藩の海岸防備などの関係資料を展示し、江戸時代の鳥取を「海」という視点から検証し、新たな鳥取の歴史を紹介する。

②⑤名 称：幕末の動乱と瀬戸内海

主催者：広島県立歴史博物館

開催時期：平成22年10月15日（金）～平成22年11月23日（火）

場所：広島県立歴史博物館

内容：有史以来、西日本の流通の大動脈を果たしてきた瀬戸内海。江戸時代末期においても瀬戸内海は、社会の変動、対外関係の緊張、そして幕末の動乱と、激動する歴史の主要な舞台の一つであった。

この企画展は、幕末の動乱から近代へと移り変わる瀬戸内海の姿と、そこで生きる人々の群像を紹介するものである。

- ②⑥名 称：「錦江湾の海上交通」
主 催 者：始良市歴史民俗資料館
開催時期：平成22年10月22日（金）～平成22年11月28日（日）
場 所：始良市歴史民俗資料館
内 容：船の模型5隻・海に関する民俗資料10点・近世の絵画資料・薩摩大隅国絵図(写し)等を中心に、錦江湾内の近代の海上交通について港や船を中心に紹介する。
- ②⑦名 称：企画展「平戸瀬戸の捕鯨文化」
主 催 者：平戸市生月町博物館・島の館
開催時期：平成22年10月23日（土）～平成22年11月28日（日）
場 所：平戸市生月町博物館・島の館
内 容：日本最古の捕鯨漁場で、西海における古式捕鯨業の始まりの地でもあり、また明治から昭和にかけて銃殺捕鯨というユニークな捕鯨法が継続した国内でも例がない漁場という、平戸瀬戸で展開した捕鯨文化について紹介し、日本捕鯨文化の地域における展開について発信する。
- ②⑧名 称：「海揚がりの肥前陶磁-海に残された有田焼-」
主 催 者：有田町歴史民俗資料館
開催時期：平成22年10月1日（金）～平成22年11月30日（火）
場 所：有田町歴史民俗資料館
内 容：17世紀初頭に生産が始まる有田焼は、江戸時代を通じ国内外に船で消費地へ運ばれた。その途次、破船した船の積み荷の陶磁器が、海底や海岸で発見されている。それらは有田焼および肥前陶磁の歴史の一面を現在に伝える貴重な資料であり、展示によってそれらを多くの方々に紹介する。
- ②⑨名 称：特別展「モササウルス」
主 催 者：岸和田市教育委員会きしわだ自然資料館
開催時期：平成22年11月3日（水）～平成23年1月30日（日）
場 所：きしわだ自然資料館
内 容：和泉山脈をかたちづくる中世代の地層「和泉層群」からは、モササウルス類の化石が発見され、その一部は自然資料館の所蔵資料となっている。また、2009年には、香川県さぬき市兼割から発見されたモササウルス亜科の標本が、発見者である金澤芳広氏から当館に寄贈された。これらは貴重な資料であるが、常設展示は行っていない。今回は、これらの化石の公開や、古生物としてのモササウルスを理解してもらうため、モササウルス類を専門に扱う特別展を開催した。当館は、今までにもモササウルスを扱った特別展（平成17年度・化石の水族館）や学校への出張授業（平成16年度独立行政法人科学技術振興機構・地域科学館連携支援事業「郷土の化石大

探検！キシワダワニとモササウルスを科学しよう」) を行ってきたが、本事業から5年以上経過した現在、新知見が増えたことや、恐竜に興味をもつ低年齢層へのアプローチなどから、本店の開催が必要であると考えた。尚、今回は滋賀県大津市にある成安造形大学の教員および学生有志、恐竜造形作家の徳川広和氏(当館専門員)など、美術関係者による展示デザインや企画立案など、今までとは違う手法で展示を構築した。

- ⑩名 称：第16回企画展 明治の呉と海軍 軍港と市民の暮らし
主 催 者：呉市海事歴史科学館 大和ミュージアム
開催時期：平成22年11月27日(土)～平成23年2月13日(日)
場 所：呉市海事歴史科学館 大和ミュージアム
内 容：明治の海軍と呉を基本テーマに、平成21年秋から平成23年秋の3ヵ年継続企画展を実施、第2弾として「軍港と市民の暮らし」をテーマに開催、海軍工廠として発展する呉にもたらされた市民生活の変化(交通、教育と文化、医療・衛生、建築、食事、娯楽)を紹介します。
- ⑪名 称：指宿まるごと博物館Ⅱ 港にまつわる奇談・珍談 いぶすき産業見聞録
主 催 者：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ
開催時期：平成22年12月18日(土)～平成23年5月8日(日)
場 所：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ
※平成23年3月16日(水)～平成23年5月8日(日)は自主開催
内 容：薩摩半島最南端に位置する本市は、錦江湾・東シナ海に面し、火山活動が形成した海岸線には天然の良港も多く、長い歴史の中で、そこから様々な産業が生まれ「まち」の発展を支えてきた。今回の企画展では、海からもたらされた文物、港にまつわる歴史、そして、そこから派生した様々な産業について、関連する逸話や昔話などを交えながら紹介し、「地域の魅力・特徴」を再発見する機会としたい。
- ⑫名 称：水辺の生きものあれこれ—外房の豊かな海と川から—
主 催 者：千葉県立中央博物館分館 海の博物館
開催時期：平成23年2月26日(土)～平成23年6月5日(日)
※ただし、4月1日以降6月5日までは自主開催
場 所：千葉県立中央博物館分館 海の博物館
内 容：海の博物館は太平洋側南部の「外房」と呼ばれる地域に位置する。外房の海や川には、豊かな自然が残り、多くの貴重な生きものたちが見られる。本企画展示では、外房の海や川の豊かさを多くの人たちに実感してもらうことを目的とする。
- ⑬名 称：開館五周年記念特別展 海を渡ったキリスト教—東西信仰の諸相
主 催 者：西南学院大学博物館
開催時期：平成22年11月2日(火)～平成22年12月11日(土)
場 所：西南学院大学博物館
内 容：日本は鎖国以前、南蛮・中国・朝鮮半島と交易し、貿易による富を

得て発展してきた。貿易の一方で、ポルトガル船やスペイン船を通じてもたらされたキリスト教文化は、当時の人たちを刺激することになり、多くの人に受容され定着していった。四面を海に囲まれた日本において、海路は重要なルートであり、物質的・文化的高揚はもちろん、思想、知識など内面的にも飛躍できる“モノ”を運んできたのは船舶だった。

日本では1549年にフランシスコ・ザビエルが来航して以来、布教が始まり、キリスト教は九州をはじめ各地へ広まった。一方フィリピンには、1521年にスペイン国王へ派遣されたマゼランがフィリピン諸島に到着し、ローマ・カトリックのミサがおこなわれた。日本ではキリスト教禁教政策がすすめられるが、フィリピンでは植民地政策のなかで、布教が展開されるといった相反する歴史があった。このように、海を通じてもたらされたキリスト教が諸国においてどのように受け入れられたのか。本展覧会ではキリスト教を受容した日本とフィリピン、エチオピアなど非西欧圏の信仰の実像に迫る。日本キリスト教史を支えた多くのキリシタンたちの姿と非西欧圏の人々の信仰形態を比較しながら、キリスト教の「受容のかたち」を見出していく。

2. 巡回展の開催（12館）

日本全国の博物館や水族館等を対象に公募し、応募のあった12館に「海と船の巡回展」アイテムを貸し出し、展示を実施した。

また、経年劣化した巡回展アイテム1号機・2号機・3号機の定期メンテナンスのためオーバーホールを実施した。

①主催者：釧路市こども遊学館（1号機利用）

開催時期：平成22年7月24日（土）～平成22年8月18日（水）

場 所：釧路市こども遊学館

②主催者：財団法人 境港市文化福祉財団（1号機利用）

開催時期：平成22年8月25日（水）～平成22年9月26日（日）

場 所：海とくらしの史料館

③主催者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ

青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸（1号機利用）

開催時期：平成22年8月30日（月）～平成22年10月31日（日）

場 所：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸

④主催者：青森県営浅虫水族館（1号機利用）

開催時期：平成22年10月2日（土）～平成22年11月21日（日）

場 所：青森県営浅虫水族館

⑤主催者：苫小牧市科学センター（1号機利用）

開催時期：平成22年11月27日（土）～平成23年1月19日（水）

場 所：苫小牧市科学センター

⑥主 催 者：浜松市博物館（1号機利用）

開催時期：平成23年1月28日（金）～平成23年3月13日（日）

場 所：浜松市博物館

⑦主 催 者：開陽丸青少年センター（2号機利用）

開催時期：平成22年7月27日（火）～平成22年8月31日（火）

場 所：開陽丸青少年センター

⑧主 催 者：みちのく北方漁船博物館（2号機利用）

開催時期：平成22年8月1日（日）～平成22年9月22日（水）

場 所：みちのく北方漁船博物館

⑨主 催 者：北海道立オホーツク流氷科学センター（2号機利用）

開催時期：平成22年10月1日（金）～平成22年11月30日（火）

場 所：北海道立オホーツク流氷科学センター

⑩主 催 者：大阪市立海洋博物館 なにわの海の時空館（2号機利用）

開催時期：平成22年12月14日（火）～平成23年1月16日（日）

場 所：大阪市立海洋博物館 なにわの海の時空館

⑪主 催 者：境港管理組合 港湾管理委員会（3号機利用）

開催時期：平成22年10月4日（月）～平成22年10月29日（金）

場 所：マリンプラザ21

⑫主 催 者：特定非営利活動法人語りつぐ連絡船の会 函館市青函連絡船記念館摩周丸（3号機利用）

開催時期：平成22年12月23日（木）～平成23年2月20日（日）

場 所：摩周丸

3. 博物館ネットワークの保守、運用

インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイト上に
て全国の海事関係博物館施設の情報を広く公開し、「海と船の企画展」情報及び
「海と船の巡回展」情報の公開を実施した。

また、博物館関係者向け項目を中心により効果的に告知するため、WEBサイ
トの一部リニューアルを実施した。

4. 支援館の研修会の開催

2006年度より船の科学館が事務局として支援した全国の博物館等を対象
とし、「海と船の企画展」支援事業を中心とした要望の取りまとめや、支援企画
展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とした地域別ワ
ークショップを行う「ネットワーク研修会」を開催した。これに伴い、参加館へ

の今後より深い海事に関する興味関心を喚起するため、日本の海をテーマとした講演会を東海大学の山田氏により講演頂いた。

事業目標の達成状況

1. 「海と船の企画展」への支援

実施33企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海事知識の啓発を広く図ることができた。

①主催者：佐賀県立宇宙科学館

入場者数：28,077人

成果：宇宙科学館は開館以来11年が経過し年々入館者が減少傾向にあるが、前年同一期間の入館者数27,277名に対しては103%とわずか3%ではあるが昨年を上回ったことは一応の成果が上げられたと評価する。

期間中に実施したクイズラリーは来場アンケートをも兼ねたが、合計4,443名の回答を回収することが出来た。アンケートの結果では企画展の内容に対して「大変満足している」が48%とほぼ半分を占め「やや満足している」の30%を加えると8割近い人が満足していると答えており来館者にも十分に評価していただけたことが分かる。

巡回展のアイテムに加え、佐賀の独自性を出すため『ふるさとの回遊魚』を設けて11種類の貴重種を生態展示した。県内でも今までこれらをまとめて展示しているところは無く来館者から大きな評価を受けた。

また、札幌市豊平川さけ科学館からサケの受精卵の寄贈を受け会期中に孵化して稚魚が水槽内を元気に泳ぎまわっていたが佐賀では今までサケの稚魚を生態展示をしたことが無く、県内初のサケの生態展示ということで九州各県の水族館からも問い合わせが寄せられたほか視察来館も数件あった。

②主催者：岐阜県博物館

入場者数：6,064人

成果：期間中の入館者は6,064名で、前年度を9%上回ったが、当初目標に対して、76%にとどまった。

巡回展を中心に岐阜大学とともに地域展示「徹底比較！長良川鵜飼 vs 小瀬鵜飼」を企画した。「私の一押し！鮎料理人気投票」などのアンケートに234名が回答した。岐阜大学と共同で地域展示を企画し、岐阜の鵜飼についてバナーグラフィックなどを使用し、視覚に訴えるコーナーを作ることができた。土日を中心に展示を企画した学生が会場に常駐することで、来館者との交流もすすみ、回遊魚の生態から魚と環境・人とのかかわり・自然の恵みについて考えることができた。

③主催者：長崎市歴史民俗資料館

入場者数：5, 327人

成果：これまで長崎の海との関わりの歴史を主題に扱った展示がなかったことから、長崎という都市のなりたちを考える上で意義がある展示になった。

今回の展示で、展示資料2点について、それぞれ学術的に貴重な発見があった。

講演「咸臨丸の歴史」においては、実際の乗務員の子孫の方が講演され、あまり知られていない歴史を広く紹介できたことは有意義であった。

④主催者：萩博物館

入場者数：67, 769人

成果：萩博物館は総合博物館として平成16年度に開館し、18年度までは専ら年配層を対象に歴史・文化に関する特別展・企画展を開催してきた。しかし、19年度夏に初めて海をテーマとした親子連れ向けの自然科学系の企画展（「君と竜宮城へ～知らされる深海への旅～」：日本財団助成事業）を開催したところ、大盛況となり開館以来最多の来場者数を記録した(26,408人:平均455人/開期58日)。さらに、21年度の特別展（「マンタの海流大冒険～まぼろしの海神王國をめざして」：日本財団助成事業）で最多記録を更新した(32,565人:平均552人/59日)。これらの成功により市内外の人々の間で「夏休みは萩博物館へ！」という雰囲気定着してきたため、当館が三度目の挑戦として「水」に関わる生物をテーマに開催したのが今回の特別展である。結果として、この展示は申請時の来場者数予想25,000人の270%にもなる67,769人(1,043人/65日)の入場があり、目標を十分に達成できたばかりか、当館の過去の最多記録をさらに著しく大きく更新した。

⑤主催者：千葉県立中央博物館

入場者数：33, 619人

成果：地球史と生命史の時系列的な変遷を細胞内共生進化を基礎として、藻類を導き手として解説、紹介し、メッセージとしての地球共生系について示した。この企画の趣旨は、閲覧者アンケート、朝日新聞などの紙上での特集記事、ナショナルジオグラフィックなど科学系雑誌における紹介などで達成したと考える。また、入館者数は、前年度131% (33,619名)を上った。しかし、内容が地球史のセントラルドグマである進化の解説など極めて学術的でかたい内容であったのか目標値50,000名には達しなかった。全体として、自然誌博物館の特性を生かした展覧会であった。

⑥主催者：香川県立ミュージアム

入場者数：8, 251人

成果：瀬戸内海という多様性のある素材を用いたことから、主担当一人で展示内容を決定することをせず、主たる部分を主担当が決定しつつ、

展示解説やワークシート作成に副担当者も関わるという方法で取り組んだ。このことが、瀬戸内海の魅力の多角的提示を実現させたと考えられる。今回の展示の対象となる小学校4年生を中心に、来館する子どもたちに単に展示をみるだけでなく、一定の学習効果（知識の獲得）があることを目標とした。展示内容に即したワークシートを作成し、観覧するだけでなく、展示をみながら考えることを行えるようにした。来館した子どものほぼ全員がワークシートを手にし、取り組んでいた。展覧会の観覧者数について、結果として、目標数値として設定していた8,000人を超える観覧者数を達成できたことから、観覧者数からの評価としては十分であると判断される。

⑦主催者：神戸大学大学院海事科学研究科 海事博物館

入場者数：1,137人

成果：来館者は当初の予想を大きく上回ることは無かったものの、海事愛好者、一般市民、近畿地区の小中高大生の幅広い年齢層に関心をもってもらえた。電子データ化された海図は、来館者自ら見たい場所を見ることが出来、期待以上の拡大率で細かい文字なども確認することができ好評であった。また、絵巻物は特殊ケースの展示により、近距離で観覧でき、特に評価が高かった。

⑧主催者：五島観光歴史資料館

入場者数：3,925人

成果：これまで多くの企画展と異なり、企画展のみの入館を無料としたことで、多くの市民に気軽に足を運んでもらうことができたことが入場者数の増加に繋がったと考えられる。また主な対象となる小中学生に対して、市内の各学校へ直接出向き、広報活動の徹底を図ったことでリピーターが多く、期間後半においても入館者数の大幅な減少を防ぐことができた。

⑨主催者：神戸市教育委員会 神戸市埋蔵文化財センター

入場者数：3,370人

成果：例年入館者数の減少が見られる夏季期間であるが、前年の同一期間の入場者数と比較して800人以上の増加が見られた。昨年度実績比132%増、目標130%増となる。

この数値は今回の企画展が、埋蔵文化財に関する普及啓発活動に大きく寄与することを証明するものと考えられる。また小学生～高校生の夏季休暇中の課題にも活用され、学校教育にも大いに役立つことが判明した。大幅に増加した入館者数を見れば、今回の支援による企画展が成功であったことは、明らかと思われる。通常間近では見る機会が少ない考古資料や、屏風、船模型などを展示できたことは、一般見学者と共に専門家のニーズにも答えられたものと自己評価出来る。また展示解説も開催期間中2回実施し、展示に関する具体的な市民からの、質問にも答える事ができたのは、次の展示企画を考える上で大いに役立った。

⑩主催者：埼玉県立川の博物館

入場者数：48,846人

成果：開催は夏休み期間であり高い目標値を設定したが前年比111%入館者があり、目標入場者数の109%となり、目標値は達成された。当館は天候により入館者数が上下しやすいが、期間中猛暑続いて厳しい条件下にもかかわらず前年を上回ることができた。生体展示やオンズオンを多く取り入れ、幅広い年齢層に対応できたと考えている。

⑪主催者：釧路市立博物館

入場者数：6,366人

成果：入館者が目標には達しなかったものの、実質62日間の開催で、1日当たり103人ほどが入場しており、一定の評価ができる。全体的にみると、1階展示に比べ、2階特別展示室の展示に対する関心が高かった。特に体験コーナーでは子供たちにたいへん好評であった。

本講演会に参加された方が講演終了後に、水鳥の減少の問題について講師のアドバイスを受けていたが、このような講演会を機会に自然環境に対する保護の実践者が現れたことは開催の効果があったと思われる。また、高校生の野外実習として特別展の開催及び解説冊子の発行は、身近な自然環境について理解を深めてもらう機会としてタイムリーなものであった。

日本財団からの助成により、全色カラー刷り冊子を発行するができ、ヒブナに関してまとまった資料がなかったので、文化財としての春採湖を含めて現状を知ってもらう教材として役割を果たしたものと思われる。

⑫主催者：滋賀県立琵琶湖博物館

入場者数：54,013人

成果：入場者数が目標の90%にとどまった原因は、前年度に較べて来館者数が2万人減少した影響が大きいと思われる。本企画展の入場者／来館者比率は29%で、当館の企画展としては平均的な値だが、前年度の企画展「骨の記憶」の36%よりは低かった。本企画展の入場率が「骨の記憶」より低かった原因としては①テーマがやや難しかった、②入口を含め全体の展示が地味だった、の二つが考えられる。来館者アンケートの結果を見ると、小学生を含む親子連れには人気があったが、幼児を含む家族連れには難しく感じられて敬遠されたようである。本企画展の解説のレベルは、小学校の中～高学年を念頭に置いたが、漢字すべてにルビを振るなど、低学年でも興味がある子どもや理解力のある子どもが取り付きやすいような工夫を行った。また模型を多用したことは、展示内容を理解しやすくする効果があったと思われる。

しかし一方で、自然モノのTV番組のような映像やシミュレーターなどの大掛かりな体験ものを期待していた人には、期待はずれで取

り付きにくい内容だったかもしれない。この中には幼児を含む家族連れが含まれ、結果として入場者数の伸び悩みにつながったと思われる。より広い層に支持される企画展となるためにはもう少しエンターテインメント性に配慮することが必要だったかもしれない。

⑬主催者：兵庫県立人と自然の博物館

入場者数：106,439人

成果：前年度の同一時期における入場者数を上回ることが最大の目標であったが、実施結果は前年度比105.2%で、この目標を達成することができた。目標を達成できた最大の要因は、夏休みから冬にかけて最も多くの来館が見込めるファミリーと小学校団体をターゲットに設定し、豊富な標本・資料を用いてわかりやすい展示を行ったことであると考えられる。また、当館のホームページを通して展示の準備状況や展示内容、関連イベント情報などを頻繁に紹介したことも成功の一因である。

⑭主催者：笠岡市立カブトガニ博物館

入場者数：12,933人

成果：笠岡市立カブトガニ博物館は、平成21年7月に館内外の展示物をリニューアルしました。昨年度は、今年度と同じく7月20日から、リニューアルオープンを記念した、特別展示「ヒサクニヒコの恐竜アート展」を開催し、12,661名の方々にご来観いただいたところです。（前々年平成20年度同時期は、8,788名でした。）今年も、リニューアルオープンした昨年度を上回る12,933名の方々に入館をいただき、目標であった、昨年度の入館者数を上回る結果となりました。カブトガニと同じ海の生物であるサメをテーマとした特別展示を開催でき、海の生物や環境保護の大切さを、少しでも子供たちにアピールできたと思われる。

⑮主催者：新潟県立歴史博物館、(財)自治総合センター、新潟日报社、NST

入場者数：12,822人

成果：入場者数で見ると、目標入場者数割合69.1%と目標値を割り込んでいるが、入場者に対するアンケート調査などでは概ね好評を得ている。とりわけ、新潟県にいながら教科書にも取り上げられるような日本各地の国指定文化財等を一同に見られる機会を設けたことは、県民に対する文化的経験の場の提供としては大いに意義があったと考えられる。

⑯主催者：尚古集成館

入場者数：57,757人

成果：期間中の入場者57,757名は、昨年度の同期間入場者62,208名の92.8%、目標100,000名の57.7%にとどまった。減少の理由は後述の通りだが、類似施設(2010年度上半期データ)の鹿児島維新ふるさと館(前年比85%)、鹿児島県歴史資料センター黎明館(同76%)、かごしま水族館(同90%)、知覧特攻記念館(同75%)と

比べると減少幅を抑えることが出来た。

また、入館者の評判はよかった。評判を聞きつけた朝日新聞の記者から、特別展に関する連載を依頼され、9月2日から9月30日まで5回にわたって特別展を紹介する記事を掲載してもらった。さらに、鹿児島放送(KKB)が展示を参考に「薩摩焼酎物語」を制作、展示期間後になったが、11月20日鹿児島エリアで放送されることになった。この他、教職員講座の参加者の依頼で、11月19日に開催される鹿児島県高等学校家庭科教育研究会(約150名参加予定)で、松尾が「海洋国家薩摩 ―薩摩の食文化―」と題して講演することになった(展示解説図録をテキストとして配布)。

⑰主 催 者：名護博物館

入場者数：1, 731人

成 果：今回の展覧会入場者は、17,434人で、今年の同時期の特別企画展「光と影のワンダーランド～アニメのルーツをさぐる」(平成20年8月9日(土)～9月28日(日))を含む同時期の入場者24,758人の70.4%、また一昨年の企画展「こどもたちのロマンワールド～昔のこども本と遊ぼう」(平成19年7月14日(土)～9月2日(日))の入場者57,610人を参考とした申請時目標入場者50,000人に対して34.9%の達成率となった。

⑱主 催 者：白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会・
白瀬南極探検隊記念館

入場者数：1, 582人

成 果：平成22年9月に延べ70,614人が訪れた、南極観測船新「しらせ」秋田港寄港事業では日本財団支援対象の南極観測船新「しらせ」(1:100)と開南丸他の模型展示を行って、本企画展の事前告知を行い、11月開始の企画展に臨んでいる。

本企画展開催中の入館者は、1,582人であり、前年度よりも112%の「上昇」となったが、開催期間中の目標には418人ほど及ばなかった。

本企画展で製作した展示パネルのデザインを活用し、持ち運びやすく、容易に設置できるタペストリーとして巡回展用に製作した。船の科学館での企画展では、13,191人の入館者、秋田県の大仙市、由利本荘市、能代市で行った県内巡回展にも、1,000人ほど来場している。

また、平成23年3月から、早稲田大学大隈記念タワー10階125展示室において展示を行うため、ポスター・チラシ等による事前告知や製作した巡回展用タペストリーや新しらせ等の模型展示を行う。東京都港区での開南丸芝浦出航100周年記念式典、秋田県内巡回展、船の科学館や早稲田大学での企画展など、白瀬南極探検隊に関する周知を秋田県内だけでなく、全国に向けた発信を行うことができた。

⑲主 催 者：福岡市博物館、栄西と中世博多展実行委員会

入場者数：19, 631人

成 果：入場者数は見込みに達しなかったが、栄西の人物像を紹介する決定版の展覧会として、また、対外交流の舞台として栄えた中世博多の歴史を広く知っていただく展覧会として充実した内容のものとなったと担当者一同自負しており、概ね成功と評価する。

⑳主 催 者：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

入場者数：2,934人

成 果：当該企画展では、南薩摩地域に残された中国などの諸外国や国内他地域との海上交流の隆盛を伝える資料等を展示・紹介し、薩摩からみた東アジア海域の海上交流史について、広く一般市民に向け紹介を行いました。企画展図録については、昨年を引き続き、県外からの入手の問い合わせなども多く好評でした。鹿児島大学付属図書館と輝津館との合同企画展「海を駆ける」と開催時期を合わせて相乗効果を狙うなどの工夫をいたしましたが、入場者数という点では、期間内入館者数が申請時目標入館者数に比し88.9%の目標達成率となり、今回は当初の入館者数目標に及びませんでした。

㉑主 催 者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：29,266人

成 果：開催期間の目標入館数30,000人に対し、29,266人97%達成した。流山市立博物館、野田市郷土博物館と利根運河を共通テーマとした合同企画展を開催し、それぞれ合同開催であることを紹介し、3館巡りのスタンプラリー等も実施したことで相乗効果があった。

㉒主 催 者：霧島市隼人歴史民俗資料館

入場者数：757人

成 果：特別展開催中の入場者の増加、宮内地区の貴重な史跡等の市内外への周知。

㉓主 催 者：鈴鹿市

入場者数：1,199人

成 果：今回の特別展が、例年行ってきた歴史分野から離れて、文学作品を前面に打ち出したことから、新たな客層の呼び込みを期待していた。結果、例年の特別展に比べて、女性の来館者が増えたことや、井上靖関係などの団体客も受け入れることができた。また、今まであまり交流のなかった文学館や資料館とも交流・情報交換することが出来、今後、今回の展示の内容をアレンジして他館で開催できないかという話も出ている。これらの点からは、当初の目標は概ね達成できたということが出来る。しかし、来館者が予想より伸びなかったことや、常連の団体の来訪がなかったことなど、数値の上では反省する部分もあり、来年度以降は開催時期の検討や個別の案内なども行っていきたい。

㉔主 催 者：鳥取県立博物館

入場者数：2681人

成 果：近年、全国的に注目されている海の歴史についてはじめて取りあげ、鳥取県の歴史の新たな一面を切り開いた意欲的な展示であった。入場者数は目標に達しなかったが、来場者の展覧会満足度は高かった。今回は、とくに漁業・水産関係者に対する広報に力を入れたが顕著な効果がみられず、PR方法に課題が残った。

⑳主 催 者：広島県立歴史博物館

入場者数：6,049人

成 果：事前・開催時・中間期・最終期と計画的に広報を行い、それが新聞・テレビなど多くのメディアに取り上げられたことで、前年度より入場者を増やす結果になった。しかし、展示テーマとの関連性が高い鞆の浦に観光客が集中しそれを展示に誘導できなかったこと、この秋の近隣の博物館・美術館への入館自体が低調だったことが、目標を達成できなかった原因と考えられる。

㉑主 催 者：始良市歴史民俗資料館

入場者数：497人

成 果：目標入場者数と同じく、50%であった。周知広報の不十分さ、口蹄疫防止の関連で、同時期開催の秋祭りなどがほとんど中止となり、その影響も多少はあるようである。

㉒主 催 者：平戸市教育委員会

入場者数：3,090人

成 果：企画展開催の告知は、広報、チラシ、ポスター等で行ったが、タイトルが平凡、目玉資料の欠落、効果的な告知方法がなかった等の問題もあって、観覧者が伸び悩んだ観がある。ただこれまであまり内外で知られていなかった平戸瀬戸の捕鯨について、情報を集約することが出来た事や、企画展のために制作したパンフレットやパネルも汎用性を持たせたため、今後も長期にわたって多少の成果が期待できると考えている。

㉓主 催 者：有田町教育委員会・有田町歴史民俗資料館

入場者数：2,566人

成 果：企画展の構成、内容についてはイメージしていたものが実現できたと思う。展示している陶磁器片に実際に触れる小さなコーナーを設けていたが、アンケート等によれば非常に好評であった。もっと「参加型」の展示の工夫をしてもよかったかもしれない。また、地元の小学校や中学校にもっと企画展の見学をよびかける努力が必要だったと思う。それら二つを今後の課題として、8割程度の目標達成と考えている。

㉔主 催 者：岸和田市教育委員会きしわだ自然資料館

入場者数：3,750人

成 果：今回は、展示計画段階から、モササウルス研究の第一人者であるカ

ナダ王立ティレル古生物学博物館の小西卓哉研究員や、成安造形大学准教授の小田隆氏および研究室の学生など、さまざまな分野からの協力を得たことにより、通常とは異なる来館者層（アート分野や研究者など）が多く来館した。また、展示途中で、岸和田市近辺から採集された、モササウルス顎骨化石の寄贈を受けたことにより、新聞各社からの取材があり、それによって、また多くの来館者が訪れたと考えられる。今回は、ツイッター・特別展ブログなどによる今までにない広報手段を用いたが、それらについても、効果があったものと思われる。

⑩主催者：呉市

入場者数：14,290人

成果：【アンケート結果より】来館者の満足度 来館者の64%が満足、目的来館率の向上 来館者の39%が目的来館、年齢層10%を超える年齢層別割合(10代、20代が前年より増加)、10代15%、20代11%、30代14%、50代12%、40代20%
昨年度より明治の呉と海軍を共通テーマに3ヵ年継続の企画展を開催。昨年度の開催期間 54日 来館者数 12,094人 1日平均 223人、今年度の開催期間 68日 来館者数 14,290人 1日平均 210人、開催期間の延長により来館者総数は、目標を大幅に超える結果となったが、12月と1月の来館者数は、2ヶ月平均前年度比87.5%であった。

【成功要因】ホームページ等での掲出、JR西日本との連携、旅行代理店等の販促広報の促進、関連イベント(人力車記念撮影会、関連商品の発売)の実施

⑪主催者：指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ

入場者数：2,301人

成果：入場者数に関しては、対目標入場者数割合が115%、対前年度同一期間入場者数割合が102%と、微増ではあるが目標を達成することができた。市内外へのマスコミを通じた広報・情報発信等をさらに積極的に進める必要があり、講座については市民(一般)を対象に実施したが、今後は子供向けの体験学習やイベントの開催も検討し、さらなる集客に努めていきたい。

⑫主催者：千葉県立中央博物館分館海の博物館

入場者数：2,344人

成果：入場者のアンケート結果からは、ミヤコタナゴやチョウチョウウオ類等の生体展示や、新聞等で話題になったピンク色のカツオ等が特に人気があり、外房の海の生きものに強い関心を持ったという回答が多く、高い評価を受けていると考えている。また、この事業を横断幕やポスター・リーフレットで知ったという回答が多く、助成を受けての広報が効果的であったと考えられる。

⑬主催者：西南学院大学博物館

入場者数：2, 927人

成 果：総評としてこれまでにない規模の展覧会が開催でき、展示資料はもとより後年にも残る質の高い図録を作成することができたことは大変評価することができる。また今回はじめて子供向けのリーフレットを製作しこれを広く頒布することができたことは、これまで博物館を利用していなかった層の開拓にもつながった。そのため、子供向けのワークショップやギャラリートークなどこれまでにない事業を展開することができ、結果的に参加者も予定を上回る人数となったことは、今後の博物館運営の事業のひとつに活かしていくことができるのではないかと。

しかしながら、当初計画による予算削減等で、本来借用予定の資料を展示できなかつたり、これに類する展示台等が製作できなかつたことは展示充実の面で不備が生じていた。また、広告手段においては従来手法から脱却できなかつた点もあり、今後広報戦略を含めて考えていく必要がある。特別展を含めて入館無料で公開している点を広く宣伝し、周辺地域の博学施設との連携も視野に入れて取り組んでいく必要がある。

今回の助成金交付事業により、これまで本学博物館を知らなかつた人を増やすことができたとともに、借用を通じて本学博物館の取り組みを他大学、博物館、図書館に理解してもらうことができた。博物館規模としてではなく、大学、自治体規模で本学の取り組みを広く知らせることができた点は、本特別展の開催の大きなメリットであった。引き続き、こうした取り組みの必要性を学内外へ発信していく必要がある。

2. 巡回展の開催

巡回展展示アイテム1号機（10点）及び2号機（7点）、さらに追加製作した人気6点の3号機を、全国12か所の博物館、水族館等において開催し、子供たちを中心とした海事知識の普及啓発を図ることができた。

①主催者：釧路市こども遊学館（1号機利用）

入場者数：15, 184人

成 果：釧路市こども遊学館では、子どもたちの夏休み期間に合わせた7月24日～8月18日まで「釧路市こども遊学館夏休みイベント2010 海と船の企画展 わたしたちのくしろ海となかよし!」と題して海をテーマにイベントを開催いたしました。そのメイン展示としてより海をわかりやすく理解してもらうため、「海と船の巡回展」を展示し子どもたちをはじめ、多くの来館者に体験していただきました。展示方法としては1階展示室内と3階展示室内の2箇所に分けて、それぞれのフロアの各所に点在して設置しました。点在して展示することで、来館者の方にフロア全体を回って頂く事ができ、他の海に関連した展示も見て頂く事ができました。今回の巡回展は実際に子どもたちが触って体験できる展示物ということで、遊

びながら学ぶことができる展示として来館者に大変好評でした。また、解説シートもわかりやすく、持ち帰ることができるよう用意されていたことで、夏休みの自由研究などに活用して頂けたようです。

②主催者：財団法人 境港市文化福祉財団（1号機利用）

入場者数：1,702人

成果：企画展開催期間中の入館者は前年より少なかったが、それぞれのアイテムに興味を向けて楽しんでいた。中でも「親子を探せ」は特に小中学生に人気があり混雑するほどの盛況ぶりだった。また、当館の目玉展示は巨大マンボウ「チョボリン」でもあり、マンボウテーブルは的を得た展示であった。海のぎょ！シアターは当初予想したほどの人気なかったのは残念であった。

③主催者：特定非営利活動法人あおもりみなとクラブ

青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸（1号機利用）

入場者数：10,198人

成果：青函連絡船元船長が八甲田丸船内をガイドしながら、「進化する船」の解説を補助して頂きました。「進化する船」の模型6隻と八甲田丸の模型を並べて、船の主要データを比較しながら展示しました。珍しい船を模型で観賞出来たことや各船の役割や特徴を知って頂けたと思っております。また、子供たちに船に対する魅力をより多く伝えられたと思っております。

④主催者：青森県営浅虫水族館（1号機利用）

入場者数：33,835人

成果：アイテムに自由に触れながら海の生き物について楽しく学び、理解を深めるための展示で、主に親子連れのお客さんが興味を示し、アイテムとパンフレットを見ながらじっくり見学していることが多かった。この子だれの子「親子をさがせ！」が特に人気アイテムで滞在時間が長かった。

⑤主催者：苫小牧市科学センター（1号機利用）

入場者数：6,462人

成果：今年の大雪の影響により昨年の同時期と比較して入場者は少なくなっているが、この巡回展を見るために来たと入館されたし内外からの来客も多く、また非常に好評であった。特定重要港湾苫小牧港を抱える苫小牧市として、市民などの来館者へ海や船への親近感や知識、関心を向ける機会になり大きな効果があったと認識している。

⑥主催者：浜松市博物館（1号機利用）

入場者数：1,592人

成果：講演、見学会等はありませんでしたが、とても好評な展示でした。特に展示場所である雄踏図書館は小学校に程近く、下校の途中に寄ってくれる子どもさんがちが多かったようです。また、土・日はご家族連れが多く来られたようです。

- ⑦主催者：財団法人開陽丸青少年センター（2号機利用）
入場者数：4, 209人
成果：「開陽丸夏休み特別企画“海と船の巡回展”」を平成22年7月27日（火）～8月31日（火）まで開陽丸青少年センター管理棟ホールにて実施、集客については江差町役場広報に別紙案内を折り込み集客に努めた。開催期間中の対前年比は800人増の123.5%と大きく入館者数の増加につながった。
- ⑧主催者：みちのく北方漁船博物館（2号機利用）
入場者数：3, 526人
成果：特に、多くの幼稚園児及び小学生が全問正解を目指して、親子パズル合わせに挑戦する姿が見受けられた。今回の展示を通して、海洋環境、海洋生物に関して、体験しながら理解し、学ぶことのできる充実した教育普及の機会とすることができた。
- ⑨主催者：北海道立オホーツク流氷科学センター（2号機利用）
入場者数：3, 548人
成果：この巡回展示物は、コンパクトでわかりやすく、遊び心もあり特に子どもたちには人気があった。7アイテムの展示物は、当施設の展示スペースにボリューム感を持たせ、充実した展示内容となり、入館者からの反応もよかった。展示のリニューアルが難しい当施設としては、この巡回展は2ヶ月という期限付きではあるものの、新鮮さを感じさせる内容で話題を提供することができ、また、施設の普及及び啓発等にも寄与するものであり、若干ではあるが前年同期の入場者数を上回る成果を得られた。
- ⑩主催者：大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館（2号機利用）
入場者数：6, 741人
成果：来館者の順路途中である海中道や、エスカレーター広場にアイテムを配置することで、より多くの方に体験して頂く事ができました。また12月にはクリスマスイベント、1月初めにはお正月イベントなども同時に開催し、昨年 of 同一期間中に比べ、来館者が1000人程増加しました。
- ⑪主催者：境港管理組合 港湾管理委員会（3号機利用）
入場者数：2, 743人
成果：巡回展開催のお知らせを鳥取県西部地区、島根県東部地区の幼稚園・保育園・小学校に郵送（約160通）。その結果、昨年度より社会科見学数が増加。館内のさまざまな場所に巡回展開催ポスターを掲示。社会科見学以外の入館者も増加。
- ⑫主催者：特定非営利活動法人語りつぐ連絡船の会
函館市青函連絡船記念館摩周丸（3号機利用）
入場者数：4, 664人

成 果：北海道の小中学校は冬休みが約1ヶ月と長いうえ、雪の影響で遊ぶ場所が限定されるため、冬の間子ども達が海や船について遊びながら楽しく学べる場となるよう、また冬休みの自由研究のアイディアのひとつとなることを目的として開催した。告知は、新聞・ラジオ・市内小学校へのポスター配布・市電の中吊り広告によって行った。NHKの取材もあり、地方ニュースのコーナーで取り上げられた。説明書は自由に持ち帰れるようにして、日時限定で無料の工作教室を実施した。自由研究の材料として解説シートや工作を持ち帰る子どももおり、海や船に関心をもつきっかけとなる展示ができたことは、非常に有意義であった。当館の展示は青函連絡船や船のしくみなどに特化したものが多いが、今回の巡回展では、大人から子どもまで、海や海洋生物について広く学び、考える貴重な機会を作ることができたと考えている。

3. 博物館ネットワークの保守、運用

ネットワークホームページを活用し全国の海事関係博物館等の情報を公開・運用するとともに、海と船の企画展情報、海と船の巡回展情報、各館イベント開催情報等を広く一般に公開することができた。

また、一部リニューアルの実施により、海と船の企画展情報や海と船の巡回展情報、ネットワーク成果物情報や研修会成果等を公開・整理し、博物館関係者向け情報の拡充を図った。

①アクセス者数：21,899人

※集計期間：2010年4月1日～2011年7月31日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：3.39ページ

4. 海と船の博物館ネットワーク研修会の開催（全国の関連博物館等を対象）

2006年度より船の科学館が事務局として支援した全国の博物館等を対象に公募し、当ネットワーク事業の目的でもある『館と館・人と人』等のネットワーク構築と更なる事業発展を目指して、平成21年度に初めて実施いたしました「海と船の博物館ネットワーク研修会」に引き続き、第2回目となる平成22年度「海と船の博物館ネットワーク研修会」を開催した。

前回に引き続き、これまでに支援を活用された館及び今後支援申請等を予定されている館に参加いただき、当事業における今後の目標や意識の共有、顔の見えるネットワークづくりの場として開催した。また、本年度は過去に船の科学館から支援をした国公立及び一般企業運営館以外にも、日本財団が助成を行った各法人・NPO団体運営館等からも初めて参加を頂いた。

第一日目には、平成22年度の「海と船の企画展」支援館3からの事例発表を行い、1館目の白瀬南極探検隊記念館の発表では、本支援が呼び水となり、市からの予算が従来よりも多く支給され、企画展の質と規模の向上に繋がったことや、当館への巡回実現や、関係各所からも巡回展示の要望が多数寄せられるなどの広がりを持った事についての発表があった。2館目の釧路市こども遊学館の発表では、日本財団からの助成を受けた事により、幅広く助成金を活用出来たために関

係各所との連携が図れた事や、市民参加の NPO の特性を活かしたボランティア活用状況についての発表があった。3 館目は昨年に引き続き 2 回目の発表となった萩博物館の事例発表で、昨年を大幅に上回った来館者数の報告と、効果的な広報や展示方法等についての発表があり、参加者からは事例発表の 3 館への質問も多数寄せられた。

その後、各地域別に分かれた班毎によるワークショップの第一日目を行い、発表館でもある白瀬南極探検隊記念館の主催により 1 月 22 日から 2 月 27 日まで当館にて開催された巡回展を見学し、「海と船の企画展」の広がりの可能性や有効活用法について参加者へ周知することが出来、あわせて一般の来館者へも「海と船の企画展」の成果を披露する機会となった。一日目終了後の情報交換会では、普段あまり接点の無い参加者同士、情報交換を通じて様々な共通項を見出し、今後のネットワーク構築の一助とした。

第二日目には、一日目に引き続いてワークショップを行い、班毎に公立博物館及び私立博物館による「複数館での共同事業の模索」を行いその成果をまとめ、イラスト資料の作成も併せて行い、各班毎に共同事業の発表を行った。各地域毎に公立・私立を織り交ぜた共同事業を発表いただく事により、各地域毎の海や船に関わる博物館の繋がりを強め、今後の地域ごとの「顔の見えるネットワーク」の基礎の構築に繋げることが出来た。また、東海大学教授の山田吉彦氏による「日本の海はいま」をテーマに講演を頂き、参加各館の担当者に「海」についての重要性を再認識頂き、今後の海や船に関する企画展の重要性を再認識して頂くきっかけとなった。

最後にアドバイザーとして参加頂いたマリンワールド海の中道 高田館長によるまとめを頂き、今後の海や船に関するさらなるネットワーク構築の重要性などについてのまとめをして頂いた。

昨年に引き続き第二回目となった「海と船の博物館ネットワーク研修会」だが、今回から新たに日本財団担当館にも参加を頂き、より広いネットワークの構築が見込まれた。事例発表や講演により今後の「海と船の企画展」の活用方法や、ワークショップによる「船の科学館を中心とした地域毎の顔の見えるネットワーク作り」の推進にも繋げる事が出来、今後の更なる「研修会」の重要性を再確認できた。

(1) 実施日時

【第 1 日目】平成 22 年 2 月 24 日 (木) 13 時～19 時

【第 2 日目】平成 22 年 2 月 25 日 (金) 9 時半～15 時

(2) 出席者

【参加者】過去支援館及び 23 年度支援予定館：53 名

【アドバイザー】

①高田浩二氏 (マリンワールド海の中道 館長)

②森田潔氏 (神戸海洋博物館 振興部長)

③伊藤隆氏 (財団法人日本科学協会 常務理事)

【講師】山田吉彦氏 (東海大学 海洋学部教授)

【事例発表者】

①石船清隆氏 (白瀬南極探検隊記念館)

②渡部鏡子氏 (釧路市こども遊学館)

③堀成夫氏（萩博物館）

（3）成果物

①参加者名簿

②事前調査書（参加者詳細）

③ワークショップ成果物（各館合同企画展企画書・チラシ）

以上